

—— 《文字・活字文化の日》 記念 ——

江戸・明治期

# 金沢の書肆と出版物 展



〔会 期〕 平成18年10月7日(土)～11月26日(日)  
月曜日休館(10月9日は開館)  
午前10時～午後5時

〔会 場〕 近世史料館展示室・同二階研修室



金沢市立玉川図書館  
近世史料館



## はじめに

「文字・活字文化振興法」が平成17年7月29日に公布され、文字・活字についての関心と理解を深めるため、10月27日が「文字・活字文化の日」とされました。

当館においても、振興法の趣旨に沿うべく「文字・活字文化の日」に合わせ、文字・活字文化に関する展示を開催いたします。

本展示は、郷土における文字・活字文化の歴史を、出版物の中から顧みて、歴史の蓄積を継承し、さらなる向上・振興を計ろうとするものです。

15世紀までの印刷は筆写体を活かした製版(木版)が行われていましたが、天正18年(1590)に西洋活字印刷が伝わり、文禄2年(1593)の朝鮮出兵では朝鮮活字印刷の技術も伝来し、日本印刷史の画期をなしました。これにより17世紀前期までは活字印刷(古活字本の時代)が主流となっていました。活字印刷の導入により出版は大きく進展し、従来の仏教書(経文など)を中心とした出版から国書や漢籍の出版が増大しました。

この後、活字は金属ばかりでなく木活字が作られ、仮名交じりの筆写体に合わせた連続活字も作られ、17世紀中頃には再び製版印刷が主流となっていきました。この動きは出版業・本屋の出現・歴史と一致するものです。

江戸時代も18世紀の出版活動は、江戸・大坂・京都を中心としたものでありましたが、当地金沢をはじめとして、名古屋・仙台などの地方都市においても活発な出版活動がなされており、出版の状況を知ることにより地域の文化を知ることができます。金沢においては江戸時代における出版活動の盛況はもとより、明治時代に入ってから新たな文化に対応した積極的な出版活動が見られました。出版活動そのものが文化であり、金沢の当時の文化水準が出版活動の原動力であり、出版が金沢の文化を反映しているものといえるでしょう。

各出版物の出版経緯を見ると、各々時代と社会相を反映しており、出版物自体が刊行時の歴史をも物語ってくれています。

本展示から金沢における出版に伴う文化の歴史を感じとっていただければ幸いです。

平成18年10月

### 【展示内容凡例】

展示史料は金沢市立玉川図書館近世史料館が所蔵するもので、閲覧などの利用が可能なものです(寄託品は除く)。

今回の展示においては、郷土の文字・活字文化の歴史ということで、江戸時代から明治時代までの出版物を対象とし、出版物が主題であり、展示史料の分野は多岐に渡ります。

また、出版の歴史を見る上から、金沢以外の出版物、明治期以降の出版物も一部展示しました。

本目録は、史料を項目に分類し、項目内は編年配列としました。これに対し展示の配列は必ずしも目録の配列とは一致しておりませんので、目録の各史料名の前に記した番号に合わせてご覧ください。また、今展示の出品物が郷土出版物のすべてではないこともお断りしておきます。

# I 初期の印刷物・印刷 (郷土出版物以外も含む)

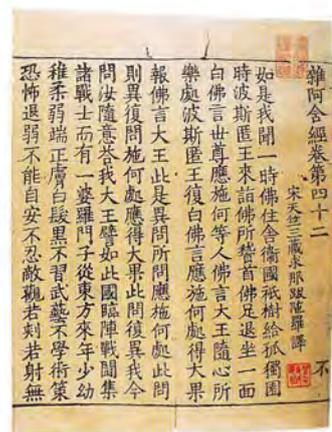
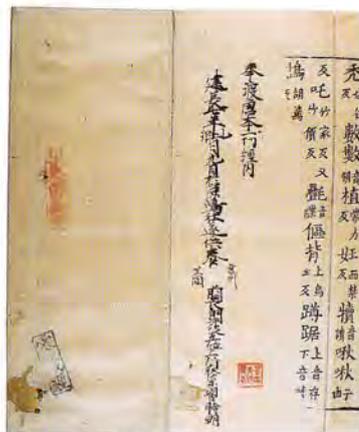
## —古活字本— 郷土外—

### 1 「<sup>どうあこんきょう</sup>雑阿含經」第四十二 091.1-276 木活字版

宋 天竺三藏求那跋陀羅訳

本書は紹興2年(1132)より刊刻されたもので、刊末識後に「奉渡唐本一切経内 建長七年乙卯十一月九日於鹿嶋社遂供養 常州笠間 前長門守從五位上行藤原朝臣時朝」とあり、渡唐本一切経を建長7年(1255)に常陸国笠間の藤原時朝が鹿嶋社に奉納したものと記される。

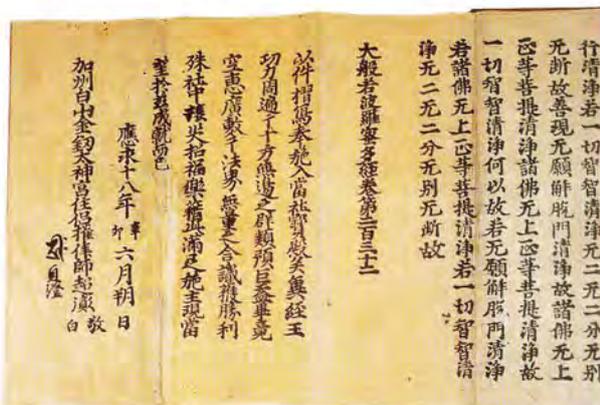
本書は現在「稼堂文庫」に収蔵されているが、鹿嶋社から水戸の立原翠軒に渡り、さらに立原家から金沢の大島賛川に移り、大島家から黒本稼堂の元に移ったとされる(金沢市立玉川図書館「近世史料館蔵漢籍目録」図版解説)。箱書には「宋経零本 雑阿含経卷第四十二 大正丙寅菊月製」とある。



### 2 「<sup>たいほんにわらびたきょう</sup>大般若波羅密多經」卷二百三十二 卷子 K1-170

唐 釈玄奘奉詔訳 応永18年(1411)刊 加州白山金劔宮加刻本 超胤跋

加賀における最初の印刷物。本文と跋文には字様や印工に違いがあり、跋文のみが後に加刻されたものとされるが、応永18年刊の白山版といえるものである(金沢市立玉川図書館「近世史料館蔵漢籍目録」図版解説)。



[跋文]以件撰写奉施、人当社宝殿矣、冀経王功力、周遍于十方無辺之群類、預巨益、畢竟空恵、広敷于法界無量之合識、獲勝利、殊社中攘災招福、樂籍此満足施主、現当望於茲成就而已、応永十八年辛卯六月朔日、加州白山金劔太神宮住侶、權律師超胤敬白 貞澄

### 3 「<sup>みょうほうれんげきょうもんく</sup>妙法蓮華經文句」卷第八 183.3-8 木活字版

慶長年間(1596~1615)刊 隋 智顛撰

### 4 「<sup>しんべんじんこうき</sup>新編塵劫記」 27.10-130 木版

寛永18年(1641)刊 吉田七兵衛尉光由著

「塵劫記」の初版は寛永4年(1627)に刊行され、同8・9・11・14年と版を重ねている。その後も版を重ね、明治までに400回を超えたといわれる。

### 5 「<sup>かんえいばんごん あたか</sup>寛永版謡本—安宅—」 26.12-1 木版

寛永6年(1629)刊 観世左近大夫入道章句付

江戸時代以前の謡本は写本が主流で、版行謡本が出現するのは江戸時代以降(慶長期後半)のこととなる。これは活字印刷の技術導入と大きく関わるものであった。

以後活字版から製版本に形態を変え、多種多様な本が出版され、元禄期前後には謡本の刊行は最盛期を迎えた。これらの中で最も多く刊行されたのが、観世流節付のものであった。

本書は「寛永卯月本」と称されるもので、奥付には「石百番之本者観世左近大夫入道暮閑章句付以令加奥書之本写之畢 寛永六年卯月日」とある。

－ 版木 －

- 6 「唐柳先生新編外集版木」「同稿本」「同書」 10.8-5 木版  
 嘉永2年(1849)刊 唐柳宗元撰 大島桃年編・出版  
 稿本・版木・版木がセットとなっており、稿本には「学問所改」の判があり、学問所(江戸昌平校)の承認による刊行といえる。



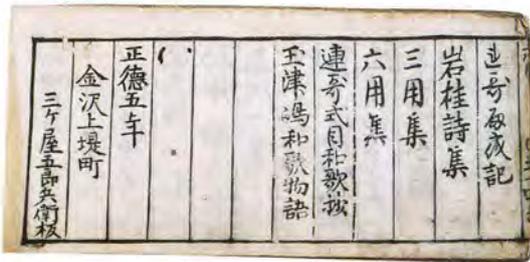
- 7 「十一面観自在尊略縁起」 32.21-4 版木  
 天明6年(1786) 波着寺祐猛
- 8 「十一面観自在尊略縁起」 32.21-4 一枚(軸装)・版木  
 年未詳 加州金府白山(波着寺)
- 9 「大宝楼閣根本陀羅尼」 32.21-4 版木  
 年未詳

寺院の布教印刷物  
 真言宗の触頭、波着寺の本尊十一面観音の縁起で、この十一面観音は泰澄大師の作と伝えられ、書込部分には阿弥陀如来の化身であるとしている。  
 その靈験は帰依者前田利家を加越能三州の太守ともなしたとし、国家鎮護の祈願所として、諸災消除・火防等をなすとする。

- 10 「破邪編」 15.1-42 木版 チラシ版木  
 明治16年刊 富樫黙惠著 佐々木義祥閱 大谷勝縁題字  
 静修堂蔵版 金沢仙石町 佐々木秀三郎出版  
 佐々木秀三郎は大聖寺藩医の家に生まれ、自身も漢方を学び明治11~29年金沢に住し、29年から東京に出るが、同38年より再び金沢に住した。
- 11 「精神論」「同版木」 15.5-198 木版  
 明治30年刊 著述・発行佐々木秀三郎 印刷東京三協合資会社  
 本書の刊行は金沢ではないが、版木と合わせ印刷について見るため展示品とした。
- 12 「金沢市民読本」前・後編「同紙型」「同写真銅版」 096.0-198  
 昭和3年刊 著作金沢市 発行金沢市教育会 印刷明治印刷株式会社  
 本書も今回の展示内容の江戸・明治期のものではないが、印刷方法をみるため展示した。

II 辞書・便覧類

- 13 「六用集」 21.0-14 木版  
 正徳5年(1715)刊 上堤町 三ヶ屋五郎兵衛板  
 新暦要覧・金沢寺院名寄・金沢ヨリ諸方道程・年中行事・加州湯本之図・金沢名方薬有所からなる。



- 14 「要覧年代記」 090-652 木版  
 元文元年(1736)刊 上堤町 書林三ヶ屋五郎兵衛板  
 標題の下に「元禄十三年庚辰(1700)改正」とあり、巻末に「右七カ條更増補之、元文元年九月十五日」とある。これから元禄13年の改正に先立つ刊行もうかがえる。内容は年代記(年表)の他に、和書年表次第記・服忌令などからなる。

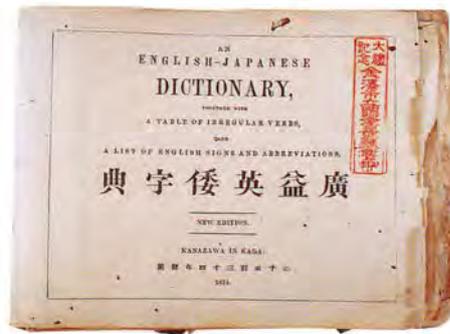
15 「<sup>こうえきえい わ じてん</sup>広益英倭字典」 833-10

明治7年刊 水生活字版 加賀 大屋愷敬 田中正義  
中宮誠之蔵版売捌書肆 金沢上堤町 中村喜平

本書は金沢において最初に刊行された英和字典である。成立の状況は序文に、英国ノットール氏辞書・亜国ウエポストル氏辞書・亜国ヘボン氏英和語林集成などから、当今要用の語四万六千余を蒐集したもので、作業には鹿田文平・芝木・小池が当たり、田川が校合したものであることが記されている。

印刷は小島到将で、小島家には水生活字が残されており、本書が水生活字によって印刷されたものとされる(金沢市立図書館『加賀洋学展解説目録』1966)。

大屋愷敬は鹿田の教えを受け、北猶館翻訳方などを勤めた。またアメリカから初めて八角時計や蝙蝠傘を金沢に輸入した人物でもある。



16 「<sup>しんせん じ かいだいぜん</sup>新撰字海大全」 813.2-2 木版

明治9年刊 八坂町 尾崎晋三編 安井顕比序 石黒雋書  
東馬場町 鍵崎半三・森下町 供田太七・上堤町 中村喜平・安江町 近田太平出版

明治期の漢字字典には明治6年に上堤町の知新堂が『広集字書』を刊行しており、本書の刊行はこれに次ぐものであろう。編者の尾崎晋三は砺波郡石堤村の医師尾崎雨甫の二男で、金沢に出て儒者林周輔に学び、藩校明倫堂文学教師加り・同助教手伝などを勤めた。

17 「<sup>しんせんえい わ じてん</sup>新撰英和字典」 833-15 金属活字版

明治19年刊 井波他次郎纂訳 雲根堂発兌  
出版人 牧野一平 印刷 経業堂

雲根堂は牧野の店名。経業堂は小島到将の店名。本書は井波字典とも通称され、編纂者の井波は木倉町で英語塾を開いていた人物である。

なお表紙の題字は北方心泉の書で、心泉は小島との間に親交があったという(山森專吉『郷土に於ける外国語学の発達と金沢版英和字典』)。本書の刊行は文部省の英語教育推進の方針が出された時期にあたる。



18 「<sup>ていせいさいはんしんべん じしよ</sup>訂正再版新編字書」 096.8-283

明治23年刊 池田町 三宅少太郎編集 安江町 近田太三郎出版  
越中町 太田文左衛門彫刻

本書は、明治16年に刊行されたものを同23年に再版したものである。

### III 教科書類 (藩校・学校刊行本含)

19 「<sup>こうせん じちん</sup>広千字文」 20.9-176 木版

文政2年(1819)刊 清 錢嘯樓著 恬淡富蔵梓 高岡 浩斎橘健撰 東林雪象書 金沢 桜井與三兵衛刊

20 「<sup>ししよかいさん</sup>四書匯參」 10.1-9 木版

天保7年(1836)刊 清 王步青輯 加賀 国学蔵板

寛政4年(1792)加賀藩は藩学校を創建し、文学校を「明倫堂」と称した。この明倫堂から本書と「監本四書」「欽定四書」が翻刻刊行されている。

「欽定四書」は天保13年(1842)に幕府より儒書の翻刻を命じられて刊行されたものである。



21 「<sup>はく かく どうしよ いんけい じが だめい りん どうけい ぼう ふげん</sup>白鹿洞書院揭示并明倫堂揭榜附言」 099.1-79

天保10年(1839)刊 明倫堂蔵版(版心に明倫堂蔵とあり)

- 22 「<sup>かんほんししよ</sup>監本四書」 099.1-54 木版  
天保15年(1844)刊 明倫堂訓点 加賀 国学蔵板  
同書(123.8-11)の巻首には「加賀国学蔵板」「金沢学校」印あり。
- 23 「<sup>おんなししよ</sup>女四書」 元・亨・利・貞 20.1-94 木版  
嘉永7年(1854)刊 孝友堂蔵板 嘉永6年加賀府助教西坂衷  
序・見返しに西坂氏孝友堂蔵版の印がある。
- 24 「<sup>しんきぞくりほう</sup>新器測量法」 上・下 20.5-1 木版  
安政4年(1857)刊 五十嵐篤好著 鳳吟堂蔵板 金沢取次書林上堤町 八尾屋喜兵衛・上安江町 近岡  
屋太兵衛彫刻師坂田屋万助
- 25 「<sup>ぶんきやうほていしやうばいおうらい</sup>文久補訂商売往来」 090-128 木版  
文久元年(1861)刊 加陽書肆堆文堂梓 加陽金府書房近岡八郎衛門版
- 26 「<sup>ほべいごうれいことば</sup>歩兵号令詞」 K3-362 木版  
慶応3年(1867)改正 壮猶館検閲 知新堂発兌
- 27 「<sup>じゅうくしりやくつうこう</sup>十九史略通考」 222.01-15 聚珍版(活字版)  
明治4年刊 金沢学校刊  
十九史略は十八史略に元史を加えて十九史としたものである。
- 28 「<sup>かんきよかなざわめいすう</sup>官許 金沢名数」 完 096.0-9  
明治5年刊 銅聚板 本文41丁 金沢学校刊 大屋愷敬著 藤田維正序 野崎近彝書  
見返し・序文は木版摺りで、本文が銅活字印刷となっている。
- 29 「<sup>しょうがくどくほんほんちやくくにづし</sup>小学読本本朝国尽」 096.1-62 木版  
明治7年刊 大屋愷敬編 高橋富兄閱 石川県学校蔵版
- 30 「<sup>せきざらひらきやくきかしようく</sup>関口開訳幾何初学」 K4-73  
明治7年刊 関口開訳 石川県学校蔵版 藤田維正序
- 31 「<sup>どうもうすうがくひっけい</sup>童蒙数学必携」 下 加算 090-1093-31  
明治12年刊 森町 高橋義盛編輯・出版 袋町 木村勘兵衛出版
- 32 「<sup>しょうがくひっけいさいほうもんどう</sup>小学必携裁縫問答」 K5-40 木版  
明治11年刊 石川県第一女子師範学校女教員岡野寿・寺西  
勝喜著 同学校監事吉田弥寿万閱 上新町 鍵崎半二出版  
外題は「女子必携裁縫問答」とある。口絵は彩色で、西尾慶次の画。
- 33 「<sup>おんな</sup>女のしつけ」 卷一・二 159.6-19 木版  
明治13年刊 石川県第一女子師範学校編輯 益智館版  
明治12年藤田維正序 同年飯山美亭画
- 34 「<sup>かいていかちしりやく</sup>改定加賀地誌略」 090-1039-7 木版  
明治14年刊 石川県金沢小学師範学校検閲 三宅少太郎編輯  
益智館蔵版
- 35 「<sup>しょうがくどくほん</sup>小学読本」 090-1039-3 ①・⑤ 木版  
明治14年間 翻刻人尾張町 田中重信・南町 野嶋信吉・  
同町 池善平・上堤町 石川敬義



本書は明治7年改正の師範学校編輯・文部省刊行の「小学読本」の翻刻版。明治15年に那珂通高・稲垣千頼撰、北爪有郷画、文部省編纂の「小学読本」を翻刻出版している。出版者は南町石川敬義・上堤町中越久二・南町野島信吉・同町当卯平・同町池善平・御歩町山田信景の六者である。さらに明治17年には石川敬義が15年版を「金沢七書堂翻刻」として刊行している。

36 「修身指要」 K3-247 木版  
 明治15年刊 穴水町 藤田維正述 広小路通 益智館蔵版

37 「石川県小学校習字帖」 K7-172 木版  
 明治18年刊 編輯・出版石川県師範学校 発行書肆益智館 菱潭巻書

38 「小学幾何教科書」 上・下 K4-53 序文木版 本文銅版  
 明治18年刊 鈴木交茂闕 田中鉄吉著 土師雙他郎序 母衣町(柳遊堂)鍵崎半三・南町(観文堂)池善平梓

## IV 新聞・雑誌

39 「官許開化新聞」(復刻版) 091.0-260  
 明治4~6年 1~29号

原版は半紙木版刷り。社主吉本次郎兵衛 編集松田亮之助・黒田某。「開化新聞」は31号から「石川新聞」と改題する。



40 「自由新誌」 K0-127  
 明治15~16年 2・7~10・11~28号  
 2号刊記-持主稲垣示 假編輯長植村石之助  
 印刷長岩室克敬 校閲宮田仲透 假本局共詢社

本紙は政友会系の新聞で、北陸新聞(明治13~15年)の人々によって発行された。

41 「加越能新聞」 K0-14

明治17年 2234・2236・2237・2239・2240・2242~2244号 社主兼印刷人岡田敦那  
 編輯加藤真氏 発行所広坂通 北溟社

明治16~26年の間発刊。

42 「北国新聞号外」 K0-365

明治27・28年 石浦町 北国新聞社発行

明治27年8月5日の清国に対する宣戦布告の「詔勅」号外をはじめとして、同28年7月6日「第一大隊字品を発す」まで66点。

43 「金城新誌」 091.0-97 K0-133

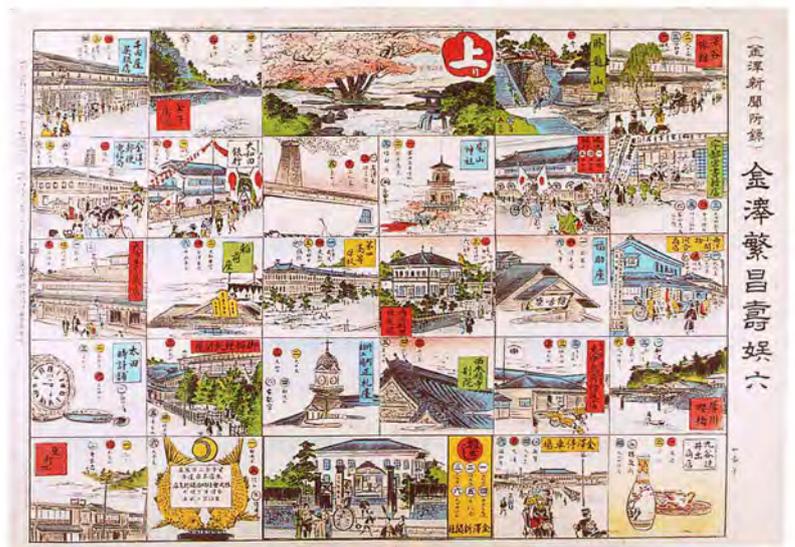
明治18~20年 1~72号 尾張町 雲根堂(牧野一平)発行 編集和田文治郎 印刷広坂通北溟社

本誌は明治18年5月9日の創刊になり、県内最初の文学雑誌といわれる。雲根堂牧野一平は明治21年には「北陸新聞」発行にも関わる。

44 「金沢新聞附録 金沢繁昌寿娛六」  
 K7-1208 石版彩色

明治35年刊 金沢新聞第五  
 五号附録 発行・編集酒井篤  
 太郎 印刷百千喜政 大村金  
 陽堂石版  
 発行金沢新聞社 巖如春画

金沢新聞新年号の附録。西町の金沢新聞社を振り出しに商店・金沢名所などを巡り、兼六公園が上がりとなっている。金沢新聞は明治34年より刊行され、35年3月には加能新聞となり、36年には廃刊となる。



45 「石川新聞付録録」 090-1070-38

明治43年刊 第322号付録 発行兼編輯米原於菟男 発行所南町 石川新聞株式会社

本紙は明治6～16年に存した「石川新聞」とは別のものである。本紙は明治42～大正5年に存した新聞である。

※以上の他、当館には明治期の新聞として、明治23～25年刊行の「自由の鐘」の222・224・225・227～229・401号(K0-12)、明治30～33年刊行の「新北陸」の846号(K0-366)を所蔵する。

新聞の刊行は江戸時代末から見られるが、近代に入ってから明治2年の「新聞紙印行条例」の公布以降の歴史となる。最初の日刊紙となるのは明治3年の「横浜毎日新聞」である。

金沢においては、明治4年に金沢県新聞社(社主吉本次郎兵衛)が発刊した「開化新聞」が最初のものとなる。これは日刊ではなく月3回の刊行で、木版刷で半紙10枚程を二つ折りにした冊子様のものであった。

## V 絵図類

46 「從加州金沢至武州江戸 下通山川驛路之図」 090-596 折本 木版

正徳2年(1712)刊 有沢永貞著 金沢書肆三ヶ屋五郎兵衛梓行

三ヶ屋は堤町不問門角に居住した版元。江戸～金沢間道中図の初の刊行物といえよう。この後、嘉永4年(1851)に「從江戸至加州金沢下通山川驛路之図」、安政5年(1858)に遠藤高環著の「驛路之鈴」、同6年に石田太左衛門著の「金城北国往還道中図」が江戸において刊行され、刊年は不明であるが京都の柏林堂からは「從江府至金沢北国往還道中記」が刊行されている。

このように江戸～金沢間の道中図は金沢ばかりでなく、江戸・京都においても刊行され、その需要の高さが推測される。



47 「江戸道中細見図」 090-546 折本 木版

刊年未詳 加州金沢書林 観音町 塩屋与三兵衛板

前項の道中図とほぼ同一で三ヶ屋版ともいえるものである。三ヶ屋は17世紀末から18世紀中頃までの出版が確認でき、塩屋は18世紀末から19世紀初頭に出版活動を行っており、本史料の刊行もこの期間のものとなる。

48 「金沢市街図」 090-280 木版彩色

明治3年刊 刊者未詳

明治3年閏10月、金沢は東西南北の4郷の行政区に分けられ、東郷・西郷に1カ所、北郷に2カ所、南郷に3カ所、計7カ所の会所が設置された。本図はこの状況を示した絵図である。

49 「金沢地図」 090-703 木版 彩色部分は菊蕪版

明治初期刊 刊者未詳

寺社版と称され、寺社の所在地が朱、町屋区域が黒で示され、八家など大身の屋敷地には家紋が付されている。

50 「小学必携袖珍日本図」 K2-825 銅版

明治9年刊 大屋愷敬縮図 石川県学校用益智館蔵版 西京 北条龍山鑄 発行書肆堤町 中村喜平・安江町 近田太平・南町 野島信吉

51 「石川県管内図」 大1051 石版

明治11年刊 石川県蔵版 大蔵省紙幣局石版印刷

石川県域は明治5年に現在と同様の旧加賀・能登国の範囲となり、明治9年には旧越中国と旧越前国の7郡が編入され、現在の石川県・富山県と福井県の過半を合わせた石川県の県域が形成された。本図はこの大石川県の県域が図されたものである。以降明治14年に福井県、同16年に富山県が誕生し、大石川県の時代が終る。

52 「故正二位前田斎泰公葬送御行列図」 090-614 木版彩色

明治17年刊 下堤町 秋菊堂工 出版人印牧政道

13代藩主であった前田斎泰は明治17年1月に74才で没した。前田家においては明治7年より葬礼を仏式から神式に改めており、本図は神式による葬列の図である。斎泰は東京で没し同地に埋葬された。

53 「石川県管内図」 22.2-99 銅版

明治18年刊 石川県令岩村高俊識 田上陳鴻・大屋愷敬校正 長田孫二・荒井時道製図

No.51「石川県管内図」の大石川県時代が終了し、現石川県の県域が誕生し、その間の変遷を経て現状の図として作成された。

54 「加賀金沢細見図」 096.0-289 石版彩色

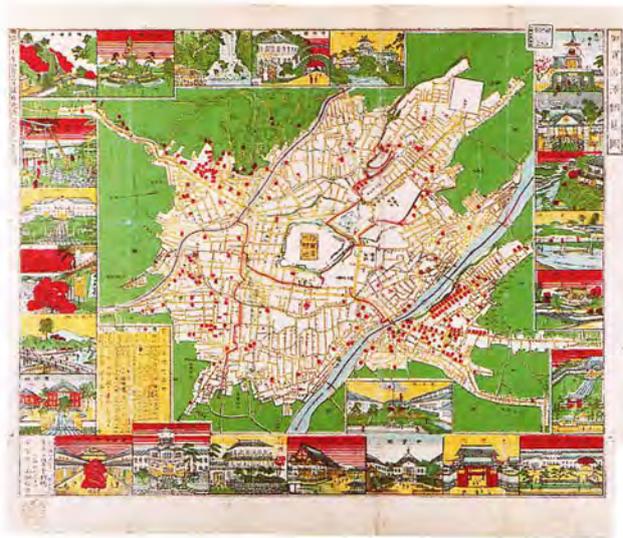
明治20年刊 橋場町 千場伝三著・版  
橋場町 山田信景発行所

明治20年の刊行になるものであるが、図の形式は江戸時代の城下町絵図と同形態をとっており、測量に基づく地形図は明治30年代からあらわれてくる。

図中の朱点は寺院を表しており、本図の特長を示すものとなっている。寺院以外の地図記号としては、神社・水溜・流水・山および学校が表記されている。

図の周囲には当時の代表的な施設・名所が絵入りで記され、実用のみではなく、名所案内図としての位置付けもできる。

著者の千羽伝三は同名の図を明治9年に刊行しており、本図は同26年にも再刊されている。



55 「金沢開市三百年祭行列明細図」 090-1098 木版彩色

明治24年刊 発行・編輯・印刷中町 田中貞吉

明治24年をもって開市300年というのは、1592年(文禄元年)を金沢開市と捉えてのことである。同年には石丸義一・筒井信由などの絵図も刊行されている。

56 「金沢兼六公園之図」 K6-999 石版彩色

明治38年刊 印刷・発行白銀町 畑久次郎  
発売所近八書房

兼六園は、明治4年「与楽園」の名で一般公開され、同7年には公園化され「兼六公園」の名となり、現在の「兼六園」の名称となるのは大正13年のことである。昭和60年国指定特別名勝となる。

図中の序文ともいべきものに「交通日に開け、名声噴々として揚り、遠近の来遊者、年に其数を増に当り、……観覧者の便益に供ふ」とあり、兼六公園の名が全国的なものとなっていた様子がうかがえ、これに対応して本図が作成された。

この年は日露戦争の日本海海戦があり、明治記念碑前で海戦大祝勝会が開催されている。



57 「尾山神社昇格慶賀祭御分霊神輿渡御行列」 K1-190 木版彩色

明治35年刊 編輯・発行尻垂坂 田中喜久太

尾山神社は明治7年県社。同35年別格官幣社となっており、官幣社は宮内省から幣帛を供進する社であり、尾山神社もそれと同格の社となった事により慶賀祭が行われた。これらの社格は昭和20年をもって廃止となった。

## VI 生活・産業

58 「正信偈和讃」 K1-331 木版

刊年未詳 上つつみ町 三がや五郎兵衛坂

59 「御算用場刷り物」 090-971 木版

天保5年(1834)刊 時疫はやりを逃れる法

### 役所の広報

疫病の流行に対し、藩(御算用場)・金沢町会所が領民・町人に出した対処指導広報である。

天保5年のものは、天明6年(1786)6月の疫病流行の際に出されたものの再版で、病気流行に対して薬法(食物)による対処法が記されている。文久2年(1862)のものは、麻疹(はしか)の流行に対して出されたもので、この年にはコレラの流行もあった。天保5年同様、食物を中心とした対処法で、1万5千枚が金沢市中に配布された。

60 「町会所刷り物」 090-970 木版  
町会所製板 一万五千枚限 売買不許

原題「麻疹養生并食物禁忌の事」。麻疹の流行は安永5年(1776)・享和3年(1803)・文政7年(1824)・文久2年(1862)にあった。流行病を沈静化させるために配布された。



61 「みつのとのいとし月頭」 449.8-5 木版  
文久2年(1862)刊 月頭版元堅町 津幡屋義助・上堤町 松浦善助 取次上堤町 柄巻屋八兵衛・南町 川尻屋忠七郎

月頭は月朔の干支や主要暦注のみを記したもので、月の上には月の大小(口数の違い)を記してあることから月頭と呼ばれた地方暦。

62 「養蚕摘要」 K6-23 木版  
元治元年(1864)刊 石黒千尋著 石崎朴軒訂正 河波有道序 桑林堂発板 石田太左衛門梓 下堤町 糸物老店組 屋徳右衛門製本



63 「春蚕養蚕永暦」 K6-22 木版  
元治元年(1864)刊 石黒千尋著 石崎桑山訂正 石田太左衛門梓下堤町 糸物老店組 屋徳右衛門

64 「明治六癸酉歳対表」 開化新聞追加 21.4-22  
明治5年刊 開化新聞社

日本の暦は、明治5年12月3日をもって明治6年1月1日とされた。これは従来の太陰暦(月の周期的変化を基礎とする)から太陽暦(太陽の回帰年を一年の単位とする)に変換したことによるもので、本史料は両者を対比したものである。

65 「二十四孝童蒙必誦」 K1-294 木版  
明治7年刊 緑雲洞主人序 発行書肆堅町 田中善平・材木町 本谷清七 彫刻堅町 三玉堂 画工木町 西尾慶治

66 「保家用文章」 090-1093-5 木版  
明治9年刊 直江菱舟書・編輯 二書堂発兌  
出版の二書堂は御歩町田中重信と観音町桜井余三平との合版になる。

67 「開化要文」 K8-8 木版  
明治10年刊 栄町 石川敬義編集 材木町 横枕清七出版

68 「厨の心得」 K3-4 木版  
明治12年青山忠次序 石川県第一女子師範学校纂輯 金沢 宇都宮蔵版



69 「改正大日本道中記」 090-335 木版  
明治14年刊 編輯・出版上堤町 石川敬義 石川顕才堂梓

70 「石川県名数異同表」 K0-53 銅版  
明治15年刊 編輯下鷹匠町 大村勝正 出版材木町 千羽伝三

71 「引札」 K6-285 木版彩色  
○金沢石浦町 御宿西村久勝 明治16年刊 編輯・出版下堤町 今井勉  
○松任 御宿商并二履物商今西久平 明治22年刊 編輯・出版賢坂辻通り 吉岡久一

商店の宣伝のための広告札。江戸末期より存在するが、明治期に多く見られ金沢における商品の拡大を反映するものともいえる。



72 「弘法大師御詠歌」 K1-296 木版  
 明治12年刊 発願主宝集寺光明真言講中 権中教正高岡増隆序 林知厚書  
 「堅禁売買」の印が押されており、講中のみの配布物か。御詠歌は一番源法院から二十一番宝集寺まで。

73 「明治廿四年辛卯略暦」 090-1012-55 木版  
 明治23年刊 下堤町 筒井信由編輯・出版

74 「略暦」 23.4-9 木版  
 明治28～39年刊 編輯・発行高岡町上藪ノ内 神宮奉齋会金沢本部 広坂通 印判師北地武明  
 明治36年のものから印刷人として北地武明の名が記されるようになる。

## Ⅶ 名鑑・番付

75 「益正月作り物見立位附」 090-112 木版  
 文政13年(1830)刊

文政13年の「益正月番付」である。近岡八郎衛門の号「探花文庫」の判がある。原題は「為御覧町中作り物・細工物・織織并ニ提灯・行灯間合見立位附」である。

76 「人持武鑑」 13.0-51 木版  
 刊年未詳 刊者未詳

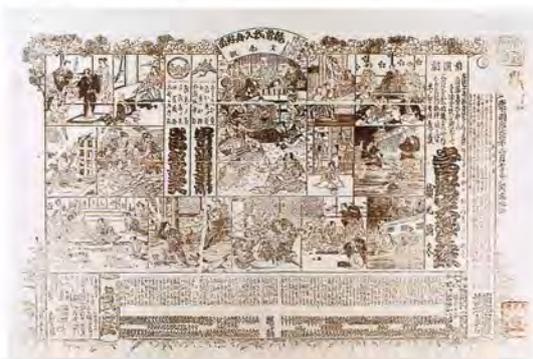
「元治元年四月求之」の書き入れがあり、藩末期の刊行になるものと考えられる。加賀藩においては「侍帳」と称されものである。「侍帳」には江戸初期の藩士を書き上げたものを初めとして、藩治を通じて作成されているが、刊行物は極めて少ない。江戸においては初期より年次毎に刊行されていた。

本書は家紋・槍印などが刷られ、武士名・禄高・屋敷地などは書き入れる形態となっている。

77 「御府内町名つくし」 090-574 木版  
 刊年・刊者未詳

78 「芝居番付」 090-942-5・6・40・84

- ・川上末吉芝居 明治8年 「東海道五拾参駅」他 板木師はくろ町 有文堂
- ・さくら馬場戎座 明治22年 「當最中大槻実録」 木町 北魁堂工
- ・香林坊福助座 明治29年 「新形蒔絵護膜櫛」 仙石町 盛文堂印刷
- ・香林坊福助座 明治36年 「江戸桜」 長町 河岸竹田印刷



79 「加越能開暮見立番付」 K7-15 木版  
 明治16年刊 編輯・出版利谷鉄次郎 版木立町 新撰社

80 「加越能古人高名一覽」 K2-243  
 明治20年大声子識・作 明治27年刊 編集・発行南町 池善平 印刷人越中町 太田文左衛門

81 「金沢香林坊大神宮大相撲番付」 090-969 石版  
 明治23年刊 七日堂石版部印行

明治23年8月の7日間、大神宮横地において興行が行われた大相撲の番付。

加賀出身の力士には東前頭として若淡祐三郎・小松山与三松、西前頭として大江山松太郎・宮ノ浦芳蔵・七尾瀧弥太郎の名が見える。

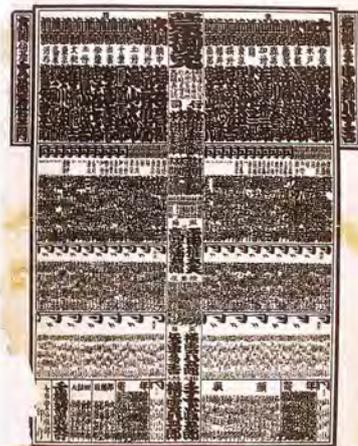
82 「尾崎神社東京西京合同大相撲番付」

寄託品 木版 明治24年刊 金沢 近広堂

8月下旬より7日間、西町尾崎神社内での興業。加賀の力士には先の若湊祐三郎が東の大関となり、他には東の前頭若ノ森三太郎・都山三太郎・荒波伊四郎・友碓政吉・加賀鼠伊三郎・鏡石甚五郎があり、西では小結に若湊与三吉・前頭に柏森与三吉の名が見られ、西方に能登の力士三名が見られる。

83 「金城三廓花の見立」 K3-100 木版

明治24年刊 穴水町 加古保五郎編集 中町 田中貞吉発行・印刷



## VIII 文芸・趣味

84 「加賀染」 寄託品 木版

天和元年(1681)刊 (杉野閨之編) 久津見一平跋 上堤町 麩屋五郎兵衛板本

85 「忘笠窠鬘桐集」 一～五 090-997-2 木版

宝永3年(1706)刊 平岩仙桂著 元禄16年(1703)大沢猶興序 伊藤祐寿跋 堤町 三ヶ屋五郎兵衛・洛陽 平野屋佐兵衛板

平岩仙桂は加賀藩の儒者で、本書は仙桂の詩集である。刊行は金沢の三ヶ屋と京都の平野屋の合版となる。

86 「こと葉の露」 23.9-55 木版

天明6年(1786)刊 天明3年(1783)小寺後川序 暮柳舎藏 博労町 板木師平藏・同 市郎右衛門梓行

暮柳舎は金沢の俳人の庵号で、初代は綿屋希因、小川後川が2代暮柳舎を継席している。

87 「花の賀集」 K9-41 木版

嘉永2年(1849)刊 刻刷南町 川後屋 書林上堤丁 松浦八兵衛

88 「俳諧三十六歌仙」 21.9-153

木版彩色 嘉永5年(1852)刊 彫工書林集雅堂・上堤町 八尾屋喜兵衛・同 松浦八兵衛

表題は仮題。表紙題箋は欠損しており、「□□くさ 全」とある。



89 「道中名所記」 16.93-31 木版

嘉永7年(1854)刊 金府等願精舎藏版

「金沢より京都まで」の名所記を中心として、湖水八景・近江西街道・洛中月次参詣記・大和めぐりなどを収める。

90 「菊くらへ」 21.3-77 木版彩色

慶応3年(1867)騎鶴山人序 近広堂刊

包み紙には「東新地細見のふれん鏡」とある。遊郭は天保2年(1831)に禁止となったが、慶応3年(1867)再び営業が認可され、本書をはじめとして「東新地絵図」(K3-102)近広堂刊・庫敬筆や「西新地絵図」(K3-101)児游写なども刊行された。

91 「東遊日録」 K9-453 銅版

明治10年刊 著・出版上柿木畠 豊島毅 門人中宮誠之・戸水信義 発兌長町 吉本次郎兵衛

奥付に「加賀国小松 書林五角堂 別宮又四郎」の印あり。貸本印であろうか。

92 「新ばん虎列刺くどきちよぼくれぶし」 K7-53 木版

明治12年刊 探花房戯作 編輯・発行近八郎右衛門

合綴版で、本題と共に「大新はんこれら流行一ツトせふし」「大新はむ虎列刺戦絵人くどき」「虎列刺病予防阿房陀羅経」を含み、「コレラ合せん」としている。また探花房は近八郎右衛門の号で、自ら「戯作唄一家元祖探花房」を名乗っている。

93 「百人一首女教草大和錦」 K3-157 木版彩色

明治14年刊 一琴楼胤信序 御歩町 春田篤次編輯 上堤町 知新堂出版 横安江町 近八書房版・発売

94 「金沢敵討宮本左門之助武辺ばなし」 K9-409 木版

明治14年刊 探花房戯作(近八刊)

- 95 「<sup>かなざわめいぶつかいあんじかえうた</sup>金沢名物海安寺かへ歌」 初編 K7-111 木版彩色  
刊年未詳(明治) 市川猿蔵作 くわんおん町 桜保板

海安寺は端唄の曲名で、金沢の名所を題材に作られたもの。刊者観音町桜保は桜井保一の略称。桜井は他に「開化どどいつ」(K9-278)などの出版もある。

- 96 「<sup>しんせんひやくにんいつしや</sup>新選百人一首」 K9-314 木版  
明治19年南無庵文器序・刊画工光嶺・蘆雪 彫刻十三間町 精広堂 横安江町 近八郎右衛門

- 97 「<sup>さいはんかなでほんちゆうしんぐら</sup>再板仮名手本忠臣蔵」 K9-346  
木版明治19年刊 編集・出版近八郎右衛門 発兌所尾張町 叢文堂

- 98 「<sup>そうほしうちゆうさうきゆうほつくしゆう</sup>増補掌中蒼虻発句集」 21.9-147  
明治23年刊 野町 砺波成作編集・発行 玄蕃町 森川斎印刷 尾張町 雲根堂発行 序文梅室 跋文嘉永5年大夢

- 99 「<sup>ほうじようりゅうしよしゆうけんこうたい</sup>宝生流諸祝言小謡」 26.22-2 木版  
明治31年刊 福井県大野町 古川松堂編輯 横安江町 近八郎右衛門発行 木町 松本茂兵衛印刷 幹旋人大野町 古河松堂・大久保秀造・松崎新太郎

- 100 「<sup>ようきくけんろくえん</sup>謡曲兼六園」 K9-442  
明治38年刊 福島杏山作 礪川迂叟刊



## IX 書肆の看板

- 101 「<sup>かんぶんどうがく</sup>観文堂額」 池善書店看板額 090-1097 81×155(cm)  
正徳元年(1711) 李東郭筆

東郭は号で、姓を李、名を李、字を重叔といい、製述官として来日している。接伴に加わった伊藤祐之は江戸まで随行し交流を深め、東郭に[観文堂]の揮毫を求め、この揮毫をもとに作られたのが本扁額である。



扁額は、のちに伊藤の書屋から前田万之助の学堂に移り、さらに維新後才川某の店頭に掲げられ、ついで池善書店に渡り店頭に掲げられたとされる(鶴園裕ほか『日本近世初期における渡来朝鮮人の研究』)。

- 102 「<sup>しやうとくわかんしゆうろく</sup>正徳和韓唱酬録」 手写本38丁 K9-444  
正徳元(1711)年 伊藤莘野著(加賀藩儒者 1681~1736)

伊藤は、名は初め由言、後に祐之、字を思忠、号を莘野・剡溪・白雪楼・春秋館・観文堂、通称を齋宮という。京都の人で元禄9年(1696)より加賀に移った。

正徳元年将軍家宣襲職祝賀の朝鮮通信使来日の時、伊藤も接伴役の慈照院祖縁と共に、大坂において通信使を迎え、江戸まで随行した。この時に製述官李東郭と伊藤との談論筆語を記したもので、中に、伊藤の書屋名である[観文堂]の揮毫を依頼した記述が出てくる。

通信使は、朝鮮国王が国書と進物をもって、室町時代より江戸時代にかけて将軍に派遣した外交使節団のことで、江戸時代には12回の来訪があった。使節団は正使・副使・従事官の三使をはじめとして、堂上訳官・上通事・製述官など以下兵士からなり、先進的な朝鮮文化や中国文化に触れる機会となった。

## X 人気戯作者作品 (郷土外)

### ◎滝沢馬琴

103 「俳諧歳時記」上・下 911.307-1 木版  
享和3年(1803)刊 曲亭主人纂輯 著作堂序 書肆東都 蔦屋重三郎・浪華 柏原屋清右衛門・尾府 永楽屋東四郎

104 「新編水滸画伝」巻五 091.8-6 木版  
文化2年(1805)刊 曲亭主人編訳 繡像葛飾北斎 酒井米助刀 書肆大坂 勝尾屋六兵衛・江戸 前川 弥兵衛・同 角丸屋甚助

### ◎山東京伝

105 「骨董集」上・中・下 096.3-2 木版  
文化11年(1814)(上・中)同12年(下)刊 醒斎老人(京伝)著 備書島岡長盈・藍庭林信 刷人朝倉吉次郎 大坂 塩屋長兵衛・江戸 鶴屋喜右衛門梓行  
巻頭部に「本安」「本甚」「河徳」「金府越前屋弥兵衛」「高橋」の印あり。貸本屋印と推測される。

### ◎十返舎一九

106 「たからふね」後編 21.9-218 木版  
文政10年(1827)刊 十返舎一九作 歌川広重画 栄林堂岩戸屋上梓

107 「青楼絵抄年中行事」上・下 21.3-76 木版  
明治41年刊(享保4年版の再刻) 十返舎一九編輯  
江戸絵師喜多川舎紫屋歌麿筆 彫刻藤一宗 摺工鶴松堂藤右衛門 書房東武上総屋忠助寿桜



### 《金沢の書肆》

金沢における書肆の始祖と言われる者に[三箇屋五郎兵衛]がある。三箇屋の名は慶安4年(1651)・寛文元年(1661)の町年寄役の中に[堤町三箇屋九郎兵衛]の名が見られる。三箇屋の祖は越前北庄の出身で木下を姓としていたが、前田利家に召されて金沢に移り三箇屋を称した(森田平次「加越能書籍一覽」)。町年寄となる九郎兵衛は三代目にあたり、書肆として名の出てくる五郎兵衛は五代目にあたる者で、「書車堂」を号とした(『金沢墓誌』)。

書肆三箇屋の刊行物は俳諧書を中心として、元禄期(1688~1703)からの活動が確認され、本展示では宝永3年(1706)「忘筌窠鬘集」(目録No.85)と正徳5年(1715)「六用集」(目録No.13)を展示した。五郎兵衛の後には三箇屋五郎作の名での刊行物が見られる。

正徳5年(1715)の「三ヶ屋五郎兵衛板行目録」(『六用集』)には、前掲書の他に「伊勢京大和廻り高野和歌浦須磨明石播州名所道図」「北陸道江戸道中図」「金沢ヨリ中仙道東海道図」「茶の湯奥儀抄」「居家要言掛物」「紅葉賀御手本」「当用御手本」「筆の海御手本」「硯の海御手本」「袖中曆」「年代一覽」「安見年代記」「前後赤壁賦」「煙草記」「立山禪定之図」「百寿図」「百福図」「連歌雨夜記」「岩桂詩集」「三用集」「六用集」「連歌式目歌抄」「玉津嶋和歌物語」の刊行物がある。

[三箇屋五郎兵衛]の出版活動と同時期に、[三箇屋]と同じ上堤町在の[麩屋五郎兵衛]という書肆の活動も認められる。[麩屋]からは天和元年(1681)に俳諧書「加賀染」(目録No.84)が刊行されている。これらから、金沢における書肆の出現と出版活動は1700年代初頭から本格化していったということができよう(麩屋については1600年代末から)。

また、金沢においては1800年代の文化・文政期に多くの書肆の出現が確認でき、藩末期に至り、出版活動の最盛期ともいえる状況を迎える。

朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』においては、地方での出版は寛政期(1789~1800)から隆盛に向かい、地方書肆の最盛期は文化期~安政期(1804~1859)であるとし、金沢については、先の[三箇屋][麩屋]の出てくる時期に地方出版の中心地の一に加わってくる地域としている。また金沢の出版の特色として俳書出版の多い地域ともしている。

明治期に入ると、印刷形態はかつての木版に加えて金属活字印刷や石版印刷が導入され、多彩な出版物が見られるようになる。中でも小嶋到将は具足師であった技術を生かして活字の鑄造を行い、金沢における活版印刷業の嚆矢をなしたと評価される(『金沢墓誌』)。また金沢の出版史の中で、金沢における最初の新聞である「開化新聞」を発行した吉本次郎兵衛の名も記しておかねばならないであろう。

近世・近代を通じて多くの書肆が輩出するが、これらの出版物については展示品をもって紹介とする。

《出版目録などに見える書肆》

◎文化8年時「金沢町名帳」(090-1034)より

塩屋与三兵衛 (観音町)		松浦善助 (上堤町)	書物商売
米永屋茂助 (南町)	書物商売	八尾屋理右衛門(南町)	書物商売
八尾屋与三兵衛(南町)	書物商売	八尾屋喜兵衛 (上堤町)	書物商売
八尾屋弥兵衛 (上堤町)	袋物并書物商売	柄巻屋重助 (上堤町)	書物・道具商売
松寺屋佐平 (御門前町)	古本商売	能登屋権兵衛 (安江町)	書物商売
谷屋半右衛門 (百姓町)	貸本商売	小川屋ぬい (野町)	貸本

◎明治9年時「保家用文章」(090-1093-5)田中重信・桜井余三平刊より

近田太平	中村喜平	近岡八郎右衛門	岡崎与平	石川敬義	浅野宇佐松
八田次郎治	八田次郎治	中越久次	越田弥兵衛	当卯平	池善平
野島信吉	供田太七	山田耕吉	増山平助	松浦八兵衛	千羽伝三
横枕保市	桜井保平				

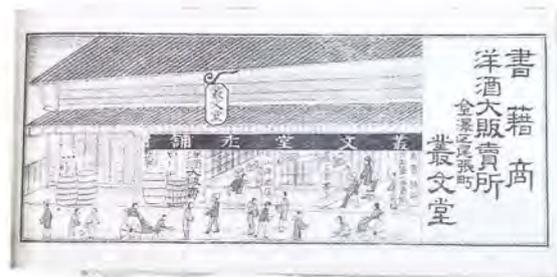
※明治10年刊「開化要文」(K8-8)には八尾利右衛門の名もあり

◎明治12年時「数学必携」(090-1093-31)木村勘兵衛刊より

供田太平	春田徳太郎	桜井余三郎	桜井保市	山田信景	田中重信
千羽伝三	大谷喜平	本谷清七	近岡八郎右衛門	浅野宇三郎	八田次郎次
石川敬義	岡崎與平	中越久次	当卯平	池善平	松浦八平
越田弥平	増山平助	武藤信吉	野島信吉	中村喜平	近田太平

◎明治15年時「修身指要」(K3-247)益智館刊より

森下町供田太七	尾張町春田徳太郎	同大谷喜兵衛	同山本久太郎
南町石川敬義	同池善平	野町山口迪徳	上堤町中越久二
横安江町近八郎右衛門	南町野島信吉	上堤町中村喜兵衛	安江町近田太平
片町益智館支店			



「石川県下商工便覧」(明治21)書店図

◎明治23年時「新編字書」近田太三郎刊(096.8-283)より

池善平 近八郎右衛門 供田太八 岡崎与平 棚田岩次郎 石井久太郎 益智館 石川敬義

※これらは、明治9年では《弘通書肆》として記されるもの、明治12年は《発弘書肆》、明治15年は《発行書林》、明治23年は《発行書肆》と記されるものであり、版元と限定できるものではないが、書肆として刊行と販売が明確に分離しておらず、販売(書店)のみとの限定もできない。

〈参考文献〉

『近世藩校に於ける出版物の研究』笠井助治著 昭和37年 吉川弘文館。『石川県印刷史』石川県印刷工業組合編 昭和43年 編者に同。明治大正期を中心とした『郷土出版物展目録』石川県立図書館他編 昭和47年 編者に同。『江戸の本屋さん』今田洋三著 昭和52年 日本放送出版協会。『江戸の本屋』鈴木敏夫著 昭和55年 中央公論社『日本出版文化史』成瀬恭著 昭和56年 原書房。『活版印刷史』川田久長著 昭和56年 印刷学会印刷部。『近世貸本屋の研究』長友千代治著 昭和57年 東京堂出版。『石川県における古版本展』石川県立図書館他編 昭和57年 編者に同。『未刊史料による日本出版文化』弥吉光長著 昭和63年 ゆまに書房。『近世地方出版の研究』朝倉治彦他編 平成5年 東京堂出版。『江戸の版本』中野三敏著 平成7年 岩波書店。『近世金沢の出版』竹松幸香著 平成9年 地方史研究269。『日本印刷技術史』中根勝著 平成12年 八木書店。『本と活字の歴史事典』印刷史研究会編 平成12年 柏書房。『加賀は天下の書府継承の世界図書文化』石川県郷土史学会編 平成14年 編者に同。



書肆印

①「加州金沢堤町書肆 御用御書物所 宝賢堂松浦善助」、  
 ④「松書林松浦善助」、②「綿平」は金沢の綿屋平兵衛のもの、  
 ③「加金城材木町 松花堂 小松屋嘉兵衛」、⑤「小嘉」  
 は③と同じ小松屋嘉兵衛のものである。これらは「三壺聞書」(写本)に押印されていたもので、貸本に書肆の所蔵を示すため押印されたものと思われる。

江戸・明治期

金沢の書肆と出版物 展

会 期／平成18年10月7日(土)～11月26日(日)

編集・発行／金沢市立玉川図書館近世史料館

印 刷／田中昭文堂印刷株式会社